

# かさおか

発行所  
天理教笠岡大教会

かさおか編集掛  
笠岡市用之江377  
郵便番号714-0066  
(0865)  
電話 66-1311  
FAX 66-1314



マメイヌツゲ カイツカ  
きれいに刈り込まれた ダルマツゲと貝塚伊吹  
(11月11日 大教会神苑で)

教祖130年祭に向かって

三年千日 さあ！ おたすけ  
祈る 動く 繋ぐ

立教175年  
12月号



# 全教に先駆けて

## 諭達巡教実施

11・20

笠岡大教会では、本部員・富松幹禎先生を迎え、11月30日午後2時より開催。大教会役員・准役員・おつとめ奉仕人・部内教会長夫妻・部内布教所長ら、285人が参加した。

(諭達講話要旨は本誌新年号に掲載予定)

去る10月26日、本部秋季大祭の日に「諭達第三号」が発表されたのを受けて、本部では、11月30日から来年2月末までの間に、全直属教会に向けて本部巡教を実施される運びとなった。



富松先生の講話を熱心に聞く受講者

富松先生の手に合わせて親神様・教祖・祖霊様を礼拝。

その後、大教会長様が「今日から御本部の諭達巡教が始まります。その初日に、全教に先駆けて巡教を受けさせていただくのは光栄です。この巡教を受けていただくご案内をしたのは大教会役員・准役員・おつとめ奉仕人、そして教会長夫妻・布教所長の方々に、全よふぼくではありません。巡教を受けてそれで終わりではなく、部内教会、布教所、よふぼくに巡教の理を流していく立場の方々です。受講後は必ず、しっかりと今度は一人でも多くの人に伝えていくんだ、という気持ちで受けていただきたい」と開講のあいさつをされた。次いで全員で「諭達」の拝読をし、富松先生から約1時間半、講話があった。

この後、大教会長様が「笠岡に繋がるお互いは6年前、教祖120年祭をつとめ、翌年から130年祭に向けて、おつとめ奉仕人の増員を目指してきました。今日までは、おつとめ奉仕人のご守護をいた

だくための理づくりでしたが、今度は、実際にご守護をいただくための歩みにしなければいけません。その歩みはたすけ一条です。まず自分が実動するとともに、一人でも多くの人に実動していただけるように、年祭活動目指して勇んでつとめさせて頂きましょう」と決意を述べられた。

最後におつとめ(拍子木・富松先生、数取・大教会長様)をつとめ、親神様・教祖・祖霊様を礼拝し、巡教の理を全よふぼくへ流していくことを誓い合い終講した。

### 大教会諭達巡教について

大教会として次の通り直轄・部内教会への諭達巡教を行います。

- ◎大教会から巡教員がそれぞれの教会に向きます。
- ◎直轄教会、1月。部内教会、2月、3月実施。
- ◎当日の次第

- ・親神様・教祖・祖霊様 礼拝(巡教員)
- ・開講挨拶 (当該教会長)
- ・諭達拝読 (巡教員)
- ・諭達講話 (約90分・巡教員)
- ・閉講挨拶 (決意表明・当該教会長)
- ・親神様・教祖・祖霊様 礼拝(巡教員)

# 別席ひのきしん団参実施

11・23

## 布教部

布教部(田中隆之部長)では11月23日「別席・ひのきしん団参」を実施、696人(布教部調べ)が帰参した。

正午から東礼拝場で、拍子木を入れておつとめを勤めた。

引き続き、大教会長様は参加者に「17日は高屋、18日は福山の創立120周年、20日は論達巡教、21日は大教会祭典と重なるなか大勢ご参加下さり喜び一杯です。10月26日、

教祖130年祭に向かっての論達のご発布を頂きました。年祭をつとめる意味は三年千日を仕切つてひながたを辿ることだと聞かせて頂いています。教祖は50年のひながたをお遺し下さいましたが、それは人だすけのためであり、人をたすける大切さをお教え下さいまし



おつとめに参集



台湾からも初席・中席に

た。年祭に向かって一人ひとりがたすけ一条の、おたすけの実動をさせて頂くことが三年千日を通して頂く意味です。共々におたすけの苦勞をさせて頂きましょう」とあいさつされた。

その後、当初、境内地でのひのきしんを予定していたが、午前中の雨の中、現場の状態が悪いため直轄東・福山・高屋ブロックは西回廊、直轄西・島根・久松・上下・府中市ブロックは東回廊ひのきしんに汗を流した。

当日の別席者数は、初席11人、中席18人、満席1人の30人。台湾からも11人が帰参され、別席は初席4人、中席2人。

## <布教部>

### ○立教175年 全教一斉にをいがけデー集計

・参加者数	52,171人
	(3日間のいずれかに参加した人の延べ人数)
教会長	14,376人
よふぼく	33,404人
その他	4,391人
・9月1カ月間の延べ人数	121,910人
・路傍講演参加者	7,000人





海外伝道への抱負を話される中西先生

## 教祖の道具衆として

### 誠真実をもつて

海外布教推進講習会

## 海外部

中西先生は異文化布教は「最終的には教祖の道具衆としてどれだけ誠真実を持って人々を導いて丹精しているかに掛かっている」と話された。講話要旨は次の通り。

海外部(上原志郎部長)は11月21日、中西光造先生(本部准員)を講師に迎え、大教会11月月次祭後に「海外布教推進講習会」を開催、役員、部内教会長、よふぼく、信者ら多数が受講した。

私は1983年(昭和58年)ブラジルに渡り、伝道庁の日本語学校の教師として2年半、サンパウロの天理会館で約6年、ブラジル伝道庁で書記として18年半勤め、現在、本部修養科の生活係として勤めさせて頂いている。

### ○大竹忠治郎先生の親心

ブラジル伝道庁の父と称されている先生は、常々私たちに「おたすけとおちばがえりだけは、決して人に負けるな」とお仕込み下された。そして異文化圏で気候、風土、言語に慣れず、大変な苦難の道を歩まれる教友に、大きな親心で包まれ勇気づけられた。戦時下では、筆舌に尽くし難いご苦勞をされた。

### ○ブラジルの道

ブラジルの道は大竹先生を偉大なリーダーとして、教友が一手一つに歩んで来た道です。初期は渡泊した日本人移民を対象に広がっていった。日本人の移民は農業契約民として明治41年6月18日、781人がサントス港に入港したのがはじまり

です。現在ではその子孫を合わせ、ブラジルの日系人数は推定150万人にのぼる。世界最大の日系社会を形成し、今では日系6世まで誕生している。1980年代に入り、今度は逆に来日するようになり、今では約30万人の日系人が滞在している。戦後、天理移民として渡伯され、苦勞して教会を設立された教会長さんの半数が1世の方です。しかし、信者さんは80年の間に日系人から混血の方、非日系の方へと広がってきている。

### ○ブラジルでの布教

その一例をブラジル修養会(海外の修養会は教会本部の修養科の分室として伝道庁に許されたもの)が1964年に開催された。以後、75年までの12年間は、日本語クラスのみの開催で、日本語の分かる1世・2世を中心にした受講者ばかりだった。

しかし、10年後の85年にはポルトガル語の受講者が、更に、それ以降はブラジル語の受講者が増加し、近年は日本語クラスの受講者が居ないという時代となった。このことから、ブラジル人に適応した修養会のあり方を考えなければならぬと思う。

同時に、ブラジルで布教をさせて頂き、異文化布教、他宗教をどう乗り越えていくかが、今後の大きな課題です。

最終的には教祖の道具衆としてどれだけ誠真実をもつて人々を導いて丹精しているか、その点に掛かっているのではないかと思う。このことはブラジルのみならず、世界中どこで布教させて頂いても同じことです。親神様のお望みになるたすけ一条に繋がる布教活動を、入信した方々にいかに示して実行して頂けるか、また、どうしたら実行して頂けるかが一つのポイントではないかと思う。

実行しやすいのはひのきしんです。これは生かして頂いている喜びを、身体を使って親神様に感謝の念を表して、更には周りの方々にも喜んで頂ける、と説明すると分かってもらえる。

近年、ブラジル青年会では、ひのきしんに力を入れていきます。今年の7月も、おちばでインターナショナルひのきしん隊に70人以上の青年会員が入隊しました。それまでは、青年会活動は楽しみ行事に流れがちだった。しかし、ひのきしんによってお道に対する意識が変わってきたように思う。

次に身上・事情のおたすけの執行へと導いていきたいが簡単にはいきません。身上の方におさづけを取り次ぎ、また、お願いごとめをさせて頂くために十二下りを覚えて、学んで頂きたいが難しいことです。しかし、座りごとめのおつとめは、努力すれば覚えることが出来ると思います。

この道に引き寄せられたら、まず朝夕のおつとめを通して神名をしつかりと覚えて頂き、座りごとめをつとめて、頂くことが大切です。それにより教祖の基本であるおたすけが実行出来、御存命の教祖を体感して頂き、何でもおちばに帰っておさづけの理を戴きたいという思いになって頂きたいのです。

### ○世界に向かって

これからお道の者が世界中へ種を蒔いていくということが必要です。

有名な教祖の逸話の中で「教祖は、静かにその一房をお手になされて、『よう帰つて来なはつたなあ。これを上げましょう。世界は、この葡萄のようになあ、皆、丸い心で、つながり合うて行くのやで。この道は、先永う楽しんで通る道や程に。』(教祖伝逸話篇一三五 皆丸い心で〓より)と、お聞かせ下さいました。陽気ぐらしの意味が心から分かり、世界中の人間が先永く結び合い、楽しんで通れるように、教祖のこの言葉の実現に向かって僅かな一翼でも担わせて頂きたいと思えます。

### 《以上要約》

## 海外布教推進講習会を開催して

(11月の大教会月次祭に合わせて)

今年は地球で日本の真裏側にあるブラジル伝道庁に28年、書記として活躍された本部准員・中西光造先生をお呼びして海外での貴重な体験を聞かせて頂いた。

ブラジル伝道開拓時代、戦争勃発による日本人の苦境、キリスト教社会へ伝道する難しさなど、日本では思いもよらないことや、想像も出来ないような大変な状況の中での先人の先生方の信仰を聞かせて頂いた。

この講習会は海外布教を少しでも身近に、という思いで開催させて頂いていますが、また同時に、こういった話を聞かせていただいて、世界宗教ながら日本の土地で育った教えが世界へ出て行く事の難しさ、世界の中での天理教の存在、役割。またおやさまが仰せられた「世界たすけ」という想いなどを聞かせていただいた話から感じられたことを、日々の信仰生活の中で少しでも生かしていつて頂きたいと思っております。

部員は先生の昼食後、客間において、海外布教における質疑応答などの時間を持たせて頂き、海外伝道の展望などを勉強させて頂きました。

前日の論達巡教に次いで、続いているの神殿でのお話でしたが、多くの方に参拝して頂いて誠にありがとうございます。書面を借りてお礼申し上げます。

(海外部長 上原志郎)

# 創立120周年記念大会

11・18 福山分教会



14交代で勇んでおつとめが勤められた

福山分教会(田中隆之会長)は11月18日、大教会長様、奥様(随行、岡本久善大教会役員)を迎え創立120周年記念大会を行った。  
これは創立120周年に当たり、10年ごとに勤めて

きた記念祭を、おつとめ奉仕人増員といううえから部内教会20か所のよふぼくと共に、14交代でおつとめを勤める記念大会として行われたもの。当日は、台湾など海外からの教友も含め約400人が参集した。

同教会では、大教会創立120周年への歩みを、同教会の創立120周年へ向けての歩みと位置付け、本年は「おさづけの取り次ぎ」「日参の励行」「修養科生のご守護」の三つの実行目標を掲げ、なかでも「おさづけの取り次ぎ」2万5千回を目指して取り組んできた。

おつとめ後、大教会長様は祝辞のなかで、おたすけを日常使う道具の修理にたとえ「道具の修理はその製造元に願うように、身上・事情のご守護は人間をお創り下さった親神様に願う他はない。真のたすけを戴く手立てはぢばに繋がるおつとめであり、人数も揃え確かなつとめをすることが肝心」としたうえで、「この記念大会を吉祥として教祖130年祭に向かって、おつとめ奉仕人をご守護戴けるような歩みにして頂くことが大切」、そして大事な角目として、「ただ単に人数が揃えばいいということではなく、おつとめを勤める一人ひとりが人たすけを願う心で勤めるということが大切であり、人にたすかかってもらいたいという心こそが、この道を通らせて頂くうえで大切なんだ」ということを心に置いて頂きたい」と話された。そ

して「この10年ごとの節目は、その元一日、たすけ一条のうえから教会設立を願い出られた一人ひとりの、止むに止まれぬ思いをしっかりと尋ねさせて頂き、その心を我が心として、次の塚を目指してたすけ一条に邁進することを誓い、第一歩を歩み出させて頂くのが今日の日の意義です」と示された。

引き続き、田中隆之同会長は大教会長様にこの一年、実行目標を掲げて取り組むなか、積極的に「おさづけを取り次ぐよふぼくが増えたことを報告し、「福山の理に繋がる私達は、よふぼく一人ひとりの実動をお促し下さるを、やの思いを心に納め、この一年の動きを教祖130年祭三年千日へと継続し、おつとめ奉仕人の増員に努め、それぞれの教会が親神様・教祖、そして先人、先輩方にご安心頂ける姿を目指して歩ませて頂く覚悟でございます」とお礼と決意を申し上げた。参拝者には、それぞれの教会にしっかりと繋がり、おつとめを勤めるよう促し、またおさづけの取り次ぎに一層心を置き、年祭活動に向かわせて頂きたい旨を話した。

大会後、アトラクションとして鼓笛演奏、各教会紹介スライド、台湾舞踊、ストンプ(※註)、バンド演奏、婦人会による踊りなどが披露され、最後は大福引大会が行われ大いに賑わった。

※註) ストンプ 激しく足を踏み鳴らしてジャズ





私達の歩みをお話し下さる大教会長様

## 創立120周年記念祭

11・17 高屋分教会

音楽に合わせて踊るダンス(ジャズのリズムのひとつで、足を踏みならすような激しく、ダンサブルなリズム)。

高屋分教会(武内正美会長)は11月17日、大教会長様、奥様を迎え創立120周年記念祭を執り行った。同教会では記念祭に向け、本年「たすけ心をもって日々歩もう」「古い信者さんの掘り起こし」「道の後継者の育成」を実践項目に邁進してきた。

当日はあいにくの雨にもかかわらず、約600人のよふぼく・信者が参集した。

参拝後、あいさつに立たれた大教会長様は、まず「高屋分教会の120年という歩みは、決して楽な道ではなかったと思う。親神様・教祖のご守護は申すまでもなく、先人達が心倒すことなくお通り下されたお陰で今日があり、創立120周年を迎えることが出来た。しかし、お祝いをするだけが今日の目的ではない。10年ごとの記念祭は初心の心に返ることであり、新たな始まりです。初代は身上事情のご守護の喜びからご恩報じをさせて頂きました。たすけ一条を心に定めて通られた。たすけ一条のもとではおつとめです。おつとめをつとめるために、教会設置のお許しを願ひ出られた先人達の思いをくみ取らせて頂いて、たすけ一条のうえに働かせて頂くことが大切」と教会設置の思い、記念祭をつとめる意義について話された。

そして「10月26日、諭達のご発布を頂き、丁度、教祖130年祭三年千日活動へ向かう旬と、120周年記念祭後の歩みの時が重なったことを考えれば、親神様からすばらしい旬をお与え頂いたと思う」と

諭達の精神である、たすけ一条の実践を促され、最後に「この旬を活かすべき、今日を吉祥として高屋に繋がる一人ひとりगतたすけ一条の心を持って教祖130年祭に向けて歩んで下さることをお願いしたい」と結ばれた。

おつとめの後、武内正美同分教会長は大教会長様に「創立120周年記念祭をつとめさせて頂き、これから教祖130年祭に向けての三年千日活動、また神殿ふしんにと心新たに、たすけ心を持って精一杯つとめさせて頂きます」とお礼と今後の決意を申し上げた。

参拝者には「120年は60年の倍です。たとえていえば還暦を2回迎えたようなもので、還暦は元にかえるという意味あいもあります。10年ごとの記念祭も初代の心に返ることだと思えます。丁度、教祖130年祭活動、創立120周年、神殿ふしんというお与え頂く大きな旬に、倍のおたすけ心を持って歩ませて頂きましょう」と述べ、今日を新たなスタートとしてを、やの思いに込えられるよう一層の成人を呼びかけた。

祭典後は、各教会から出された模擬店、和太鼓、鼓笛・雅楽演奏、ダンス、福まきなどのアトラクション、大教会長様・奥様も参加された福引きが行われ、フィナーレは「明日があるさ」を大合唱し、勇みふしん、倍のおたすけを誓い合った。

## 創立120周年記念祭

9・16 神邊分教会

神邊分教会(小坂静宏会長)は9月16日、大教会長様、奥様を迎え、9月月次祭に合わせ創立120周年記念祭を執り行った。

当日は晴天のなか、同教会に繋がるよふぼく・信者が参集した。

参拝のあと、大教会長様は「勇んで道一条にお通り下さい」と一同を励まされ、一手一つに陽気におつとめが勤められた。

## 温故知新

## いきいきエピソード 20

赤木利行先生(吸江分教会三代会長)の思い出話

初代様に初めて身近にお目見えたのは私が十四歳の初夏の頃であったと記憶しております。(赤木先生は大正3年生まれ。昭和3年4

月に笠岡分教会青年を拝命している。)当時青年に入って未だ間もなく無論私に信仰がもうう筈もなく、全く教会制度が矛盾だらけとしか映らない頃で、どなた様であろうと一向お構いなという生意気盛りの時代でありました。その日も気紛れから会長宅のお庭の掃除に降り立つと、その前から盆栽の手入れをしておられた初代様も、私の目には只の老婆としか映らず挨拶もせず箒を動かしていました。すると何時の間にか音もなく近づかれていて「えらいな、おまはんが赤木はんか」とお声を頂いた。その親心も実の処、内心憤懣のやり場を求めていた私の心には、実は瞬間的ではありますが挑戦的な感情が走りました。然し余りにも間近に寄せられていたお顔を拝して、疎(うと)むように思わず

「はい」と案外に素直な返事を致しました。然もその瞬間から、たった今僻んでいた心が何処かに飛び去っていました。暖かい血が流れ込んできたように思えたのです。

「神様の事が出来て勿体ないやろ。喜ぶんやで」と私の振り向いた顔を見据えるように言われました。その態度とお言葉の中に拒みがたい慈愛と威厳がありました。

そんな形で初対面をさせて頂いたのですが、

それからの私の心には、まともな事が考えられない性分を自覚しているので、何やら底の底まで穢い面まで覗かれるような気がして恐ろしいような気がしました。それ程にそのときの私の心の動きにタイミングの合ったお言葉を頂いたように思います。

初代様は会長宅の二階に何時もお控えになつておられ、時折夕刻お庭に降り立つて盆栽に手を触れておられる姿をお見かけする程度ですが、その垣間見る風格あるお姿の中にもお徳を偲ぶ事が出来ました。瞬きもなさらず視線を向けたまま見据えられるお方でその後滅多にない御用を仰せつかる時も、先ず心を改め襟を正してから参上致しました。そうせざるを得ないものがありました。為さる事言われた事を外の人から伝え聞いて、その一事一句から初代様の人徳を私の心の中に憧れのように画きあげていました。

そうした或日、会長様(三代会長)の御用を承つての帰り、階段から降りて来られた初代様に廊下でバツタリとお会いしました。もう心を整える間もなく頭を下げると、

「おまはん、すまないが一寸用事をしてんか」と言われて庭に降り立たれました。



「この鉢よいだろ、こつちへ持って来てんか」と言われ教祖殿の前へ運ばせて戴きました。その間も何やら背後から見透かされているように落ち着かぬ思いがしました。果たせるかな、

「おまはん、お母さん憎むんやないで、ええか。お母さんが居るからお父さんが機嫌よく働くんや。皆神様の事やで」

私は全くビックリしました。どうして私の心の中が分かるんだろう、実に凶星ヘグサツと突き刺さったように、かえってうすら寒いものを覚えて「ハイ」と目を伏せたまま返事して退散しました。

実は私の母とは、なさぬ仲で私の八歳の時に後入って来た人で、それ以来私は愛情を失った少年時代をいやという程託(かこ)つてきました。(父・初太郎氏は大正2年、生田キクヨ女と結婚、大正13年キクヨ女を離別し市園ミ子女と結婚)そのため私の心は最初にも述べましたように知らず知らずのうちに妙な反抗心となつて歪み、長じるに従って自立の道が立てば仇を討つぐらいの気持ちでしたのです。だからその日も何かと考える上に気持ちが高ぶり、こんな事していたらという案じと母への憎しみ

が頭を擡げていたのです。たとえそういう事情を初代様が他から聞かれて知っておられたにせよ、まことに当を得た言葉がおさしづのように簡潔に出る訳のものではないと思います。大教会に置いて頂いていても、いつも曇り空のような心で過ごしていたのでありますが、この日以来、僅かではありますすが心に明るさを持つことが出来るようになりました。長年培われた性格はそう簡単には直りませんが、初代様のあの時のお言葉で、自らの心の闇の一端を自分で自覚できるようになったと思います。

数年の間に、ほんの数える程しかお会いした事はないのですが(赤木先生は昭和3年分教会青年拝命後、昭和9年まで大教会に住み込みその後岐阜の紙問屋に勤める)、実に強烈に初代様の面影は私の心に焼き付いております。

以上「かさおか」誌に掲載の文章である。少し言い回しに分かりにくい部分があるが、赤木先生の物言いがそのまま伝わってくるようで、訂正せずに掲載する事にした。

(笠岡史料部長)

## <管理部>

### ○大教会大掃除

12月22日(土) 午前9時より

## <詰所掛>

### ○餅つきについて

日時 12月26日(水) 午後2時より準備

12月27日(木) 午前7時より開始

### ○参考館招待券について

1月5日～3月4日「日本古代の鏡」が特別展示されます。無料招待券(100枚)が詰所にあります。

# 笠岡大教会 年間行事 予定表

部会 月	婦 人 会	青 年 会	少 年 会	学 生 会 学生担当委員会
1				
2	3 委員・直轄委員部長研修会			
3		23・24 十三峠越え	30～1 鼓笛バンド講習会 1 おつとめまなび総会	3～9 学修 大学の部 21 学生層育成者講習会 28 春の学生おぢばがえり
4	19 婦人会本部第95回総会 (午前9:30)			27 新入生歓迎会(おぢば)
5			21 縦の伝道講習会	
6	22・23 こかん様に続く会	1～24 青年会ひのきしん隊		
7				
8		15・16 あらきとうりょう入門塾	22～24 キャンプ	9～15 学修 高校の部 学生親睦会
9	22・23 委員部長後継者講習会	1～8 全分会布教推進週間		
10		27 第89回天理教青年会総会		
11	4 第27回 女子青年大会 (午前9:30) -親子で大会に参加しよう-	24 青年会員のつどい	23 てっちゃんとおぼろ (わかぎのつどい)	
12				
備 考	◎例会日(毎月3日) ◎直轄委員部長連絡会(21日) ◎ひまわり会(1日) ◎女子青年例会(随時) ◎大教会掃除ひのきしん (毎月19日)	◎月例活動日	○教会おとまり会の実施	

◎よらぼく勉強会 毎月21日 午後1:15～2:00 (3月・5月・11月は休み)、おさづけの取次 毎月次祭直後

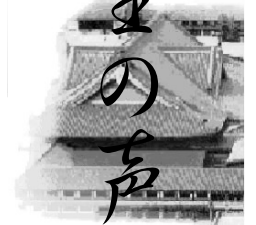


# 立教 1 7 6 年(平成25年/2013年)

部会 月	全体行事 その他	ひのきしん	布教部	海外部
1	4~18 直轄教会春季大祭参拝 (諭達巡教) 20 年頭会議	25~27 春季大祭詰所受入		
2	2~15 部内一斉巡教 28~3/1 修養科修了講習会	16~28 本部食堂(島根ブロック)		
3	2~15 部内一斉巡教 24 雅楽勉強会			観光地での 外国語パンフレット配布
4		17~19 教祖ご誕生祭詰所受入	28 教会長夫妻講習会 (大教会) 29 全教一斉ひのきしんデー	
5	4~18 直轄教会定期巡教 19 大教会長杯親睦スポーツ大会 <b>25・26 別席・ひのきしん団参</b> 28・29 修養科修了講習会	1~15 本部食堂(福山ブロック)		タンザニアおたすけ訪問 及び衣料配布(10日間)
6		1~20 直属ひのきしん特別隊 (高屋ブロック) 30 教祖130年祭「若人の集い」		
7		1~20 直属ひのきしん特別隊 (上府ブロック) 16~31 本部食堂(西ブロック) 25~4 こどもおちばがえり詰所受入		
8	26~4 こどもおちばがえり 28・29 修養科修了講習会			7・8 英語講習会
9			1~30 布教推進強調月間 3・4 布教部活動日 28~30 全教一斉にをいがけデー	
10	4~18 直轄教会秋季大祭参拝	1~15 本部食堂(東ブロック) 25~27 秋季大祭詰所受入		
11	28・29 修養科修了講習会			観光地での 外国語パンフレット配布 21 海外布教推進講習会 (月次祭に合わせて)
12	20 心定め提出 22 年末大掃除	27 詰所餅搗		
備考	◎常話会議 毎月29日 午前10:00 ◎役員会議 毎月29日 午後 1:00 ◎役員並びに直轄教会長会議 毎月29日 午後 2:00 ◎直轄教会長の集い 毎月20日 午後 2:00 ●雅楽会練習 毎月次祭前日夕勤後 舞楽練習 随 時	註：ブロックの区分けは 東：岡山県以東の直轄教会とその部内教会 西：広島県以西の直轄教会とその部内教会 上府：上下、府中市	◎おかえり講話 4月17日、5月25日、 10月25日 いずれも午後 7:00	◎月例勉強会(毎月21日) ◎『英文かさおか』発行 ◎海外よふぼく月報

◎常話会議・役員会議・役員並びに直轄教会長会議：2月は末日、4・7・9・12月は20日(直轄教会長の集いに替えて行なう)

# 修養科生の声



弥高山分教会 岡崎 治喜

修養科を三ヶ月無事何事もなく修了する事ができ、大変嬉しく思います。思えば嫌々ながら来させて頂いた修養科ですが、振り返ってみれば大変有意義なものでした。来た当初は憂鬱で仕方なかったのですが、来させて頂いたからにはしっかりと通らせて頂くと思っていました。私は教会の子供でありながら、まともにおてふりも出来ないものでしつかりと覚えて帰る事、又教典や教祖伝も読んだことも無かったので、授業でちゃんと学ばせて頂くとう心を決めていました。お手ふりは教養の先生方や授業で細かい所まで丁寧に教えて頂き、拙いながらも何とかできるようになりました。教典、教祖伝に関しては、初めの内はしつかりとノートもとり、先生の話しに耳を傾けていたのですが、途中から気の弛みか、寝て過ごす事が多くなり、しつかり学べなかつた事が心残りであり、深く反省しております。帰ってから又、自分で読み返し、学びたいと思います。詰所での生活は、気の合う若い仲間や優しい御年輩の方々と大変楽しく過ごさせて頂きました。ただ、人数が多い事

もあつてか、詰所内の割り当てられたひのきしんがすぐに終わってしまい、自由になる時間が多く、初めの内はただただ漫然と過ごしていました。何をすることもなく、部屋で横になりポーツと過ごしているのでは自分が駄目になると思い、空いている時間はなるべくひのきしんをするように心掛けた。主に詰所の草抜きをしていたのですが、雨の日や他の用事が無い時以外は休む事なくできたので、ちよつとした達成感もあり嬉しく思います。又、草抜きをしながら、今後の事や色々の事に思いを巡らせる事も出来、充実した時間でもありました。今回の修養科で一番良かったなと思う事はおさづけを取り次げた事です。私は用木になつて4年半ほど経つのですが、これまで一度もおさづけを取り次いだ事が無かつたのです。というのも私は余り信心深い訳でもないのですが、その様な者が取り次いだおさづけに効果があるのかと思つていましたし、気恥ずかしさもあつて取り次げなかつたのです。初めてのおさづけは、実習での取り次ぎですが、真剣に心を込めて、手順も間違える事なく、たつた一度のだけのおさづけでしたが、取り次ぐ事が出来たという事実が私の中では重要であり思い出深い出来事でした。修養科の3ヶ月、最初の一ヶ月は異様に長く感じましたが、2、3ヶ月目はあつと言つて過ぎて行きました。もつと何か出来た事があるのではないか、これ

良かったのか等と考えもしますが、詰所やクラスの気の良い仲間達に出会えた事や、お道の事について学べた事、他にも様々な得るものがあり大変貴重な時間を過ごさせて頂いたなと思つております。今回得たものを心に留め大切に、これからの生活に活かして行きたいと思ひます。

芦品分教会 小林 謙太

三ヶ月間、楽しく元気で無事に終えることができました。これから親孝行して家族の絆を深めていきたいです。ありがとうございました。

稲瀬分教会 前原 啓史

3ヶ月間の修養科生活を通して、周りに気配り出来る心が養われたと感じています。これからの人生、修養科で得た大切な経験や教えを忘れる事なく、勇んで通らせて頂きたいと思ひます。

米美分教会 三代 斉幸

修養科の3ヶ月間の生活が終わろうとしている今、振り返ってみると3ヶ月間とても早かつたように感じます。私たち857期の修養科生は、全員で12人と近年では多く、にぎやかに楽しく過ごすことができましたように感じます。また、修養科生の中で私が22歳で一番若く、いろいろと気にかけていただきありがとうございました。教養主



任の横山先生をはじめ、助員の吉岡先生、津森先生、仙田先生、大変お世話になりました。これから皆、元の生活にもどりますが、修養科で3ヶ月学んだことを忘れないよう、また少しでも実践できるようにしていきたいと思います。

簸ノ川分教会 津森 一重

修養科には仕事とのタイミングを見計らい来させて頂くと思っていましたが、結婚も決まり仕事にもケジメがついた為、修養科させて頂きました。以前より仕事でイライラすることも多くなってきた為、今回心素直に腰を低く、笑顔で通らせて頂くことを心において入りました。笠岡詰所での入所式が始まり、自分と同世代からは82歳まで12人という大所帯、皆さん元気ハツラツとしていて、ひのきしんや修練でも活気溢れる修養科生活となりました。以前より時間に制限されないせいか、心のゆとりが出来た為かイライラすることも少なくなり、本当に有難いことやなあと思います。ただ、また修養科生活を終え、家庭生活に入り、仕事も復帰すればイライラすることも必然のように起こってくると思います。修養科で学んだ、不足心を持った時の切り換え方を意識すること、又、その心の中に積もるほこりを大きくさせない為にもおつとめを行い、本日も何事もなく通らせて頂いたことに感謝し、今後の生活を送っていき

ます。3ヶ月間見守って下さった教養係の先生、詰所の方々、笑いと包容力ある修養科生、遠くからあたたかく支えて下さった両親、信者さん、本当にありがとうございます。

多古浦分教会 山田 廣國

私は多古浦分教会の会長さんの勧めで修養科へ志願しました。修養科へ来る前に会長から「何か一つ身に付けて帰って来て下さい」と言われ約束してきました。修養科の生活も3ヶ月目に入り、会長との約束をはたす為、鳴物やおどり(よるぶ八首、十二下り)の練習に取り組んでいます。まだ十分にこなす事は出来ませんが残り一ヶ月で可能な限り成長したいと思っています。また修養科の生活を通して私達の生活リズムが規則正しく改善されてきていると感じます。また詰所でのおつとめや、おどり修練にはげみました。

眞府分教会 藤田 宗士

有り余る時間で自分を見つめ直すことができました。

東城分教会 横山 真衣

六年前に頂いた身上と心の入れ替えをする為に自ら志願した修養科。本当に行って良かったと思います。修養科での生活はすごく楽しく和気あい

あいと賑やかな三ヶ月を過ごさせて頂きました。クラス代表として感話大会に出させて頂き、胸の内を話すことができました。たくさんの方々が笑顔で接して下さい、私の気持ちも陽気になり、心が元気になりました。八五七期の方々と共におさづけの理を頂いたことがすごく思い出に残っています。修養科は私の心に一生残る大切な思い出となっています。お引き寄せ頂いたこの出会いをこれからも大切にしたいです。

芦品分教会 青木 縫子

四〇年前に修養科を修了しました。今回が二回目です。四〇年前は詰所も古い詰所で大変でした。掃除にしても食事何にもかも不便な時代でした。それでも勇んでました。本部と詰所を何回となく往復したものです。今回私も不幸が続き主人が二年前に八〇才で出直しました。今年七月娘の婿が五十六で出直しました。親としてどうすればいいかと思ひ修養科に出る事を決めました。次の日娘から長女の婿を連れて出てもらえないかと言われほんとに喜んで引き受けました。私にとつては孫の婿になるのです。その婿も七月に東京から広島へ孫と一緒に帰って来たばかり、親に修養科へばあちゃんと言われ素直に返事してついで来たのです。大丈夫かなと一寸不安でしたが教養掛の先生に厳しく又やさしく教えて頂き、お

てふり鳴り物何でも出来る様になり先生に感謝しております。十九日はおさづけも頂き用木となりました。ありがたく涙が出る思いです。先生方のおかげです。感謝の心でいっぱいです。私も役目を果たす事が出来ました。又私は修養科中に八〇才を迎えることが出来てほんとに幸せです。三ヶ月間若い人達に助けられて元気で修了出来、皆様に御礼申しあげます。これから教祖百三十年祭に向かつて頑張つて行きます。ほんとに喜びでいっぱいです。有りがとう御座居ました。

天場山分教会 野津萬知子

三ヶ月の修養科生活もあと二日となりました。娘主人私息子今年になってから妹と次々に御守護いただき、親神様、教祖に御礼申し上げたく、又お道の更なる向上を目指しておぢばに帰らせていただきました。おぢばでも老眼鏡が全く必要なくなるという御守護を戴きました。八月詰所に着いた翌日に何十年音信不通だった甥が神殿に参拝してから訪ねてくれました。ここで又神様に感謝申し上げます。修養科生活の中でも度々存在を示して下さいました。その一つに詰所で同期の八十二才のFさんを黒門前でお手振りおつとめに参加させてあげた時、天理教の事も知らなかったFさん神殿が見えるなあ言葉に私は涙が溢れました。よろづよから十二下り迄休みなしにおつとめ

されました。Fさんの参加に当たり風邪は私が引き受けますと神様に約束してた通り翌日から二日程鼻水が出て「神はここに居るぞ」とお知らせ頂いたと思います。詰所では横山先生を忖に副の教養掛の先生と修養科生はいろいろのきしんさせて頂きました。一階から三階迄のゴミ箱の清掃は印象に残っています。全員嫌な顔せず協力して励みました。今月十八日若い人に負けないで十三峠を歩きこかん様を偲びました。詰所主任御夫妻、事務所の先生方、そして毎晩のお風呂は格別でした。充実した修養科生活でした。親神様の思召し、教祖の思いをしっかりと治めさせて頂きましたので次世代、隣り近所、地区にほいがけをし、教祖の百三十年祭に向けて頑張りたいと思います。教祖の前でのまなび、昨夜大教会長様に手おどりを見ていただきうれしかったです。親神様、教祖有りがとうございました。

稲瀬分教会 前原英子

27年前、夫の身上から夫婦子供二人の四人で修養科に出させてもらいました。その時一緒に連れてきていた長男の身上・事情でこのたび二度目の修養科となりました。入信の動機は子供に恵まれず夫の姉から別席を勧められ満席の時に妊娠している事がわかり、おさづけも戴き無事に子供も授かる事が出来ました。修養科では授業、長期ひの

きしん神殿掃除、心定めしたひのきしん等休まずにつとめさせて頂ける健康を有難く思わせて頂きました。30年近く付き合ひのある友人が一期下で修養科に御夫婦で入られました。一ヶ月目は車イスで通うことが出来ましたが二ヶ月目に入り憩いの家に入院されました。お見舞いに行かして頂きおさづけを取り次がせて頂きました時、涙が溢れ声にもならないものでした。それでも心のこもったおさづけを有り難うと握手してきてくれた彼の手は病人とは思えないほど力強いものでした。その握手が最後となり一週間後に出直されました。癌があらちちらと転移していたようです。

絶対に御守護頂けるからと励まし合ひ、心定めをしてお願いづとめをしたきたこともあつて、この事は思いがけないことでした。悲しみと無念さは有りますがお地場で出直されたことはやはり御守護だったのではと思います。最後に、おさしづの中から、「神の自由して見せてもその時だけは覚えてる、なれど一日経つ十日経つ三十日経てばころつと忘れてしまふ。日が経てば、その場の心がゆるんで来るから何度の理に知らさにやならん」。私の信仰は全くこの通りだと思えます。神様は人間に忘れるということを教えて下さり悲しみ苦しみを時間と共に軽くしていつてくれていきます。しかし恩を忘れる事はしてはいけません。改めて気を引き締めて、このことを心に治めてつ



とめて参りたいと思います。

鶴眞分教会 藤井末子

修養科の修練に参加させて頂いて三十代の若い人と肩を並べて勉強させて頂いて考へ方が自然に少し若返らせてもらえた様で有難く感謝しております。又特にその都度親切にねいにアドバイスを手に取る様にやさしくしてもらえた時の喜びと嬉しさは私の残りの人生に何時までも忘れられない美談として心のささえとなる事と思います。この少しみだれ気味な世の中にこの様な考への若い人がおられることを見直し有難く又昔の教育を受けた者から見ると心強く嬉しく思います。修養科に来させてもらった後と前とは私の考へ方思ひ方が百八十度変わったように感じます。何事もプラス思考に考へる様になろうと又人生の尊い先輩者であることの自覚もしてその様に努力しようと努めました。がまだまだと悔いております。



## 教会おとまり会の報告

### ▼福満隊

実施日 平成24年7月21日～22日

参加者数 少年会員17名 育成会員11名

合計28名

### プログラム

21日 17:00 受付

30 会長さんのお話し

18:00 夕づとめ

30 夕食

19:00 ゲーム、花火

20:30 入浴

22:00 就寝

22日 6:15 起床、洗面

30 ラジオ体操

45 朝づとめ、会長さんの話し

7:00 ひのきしん

30 朝食

9:00 海水浴、スイカ割り

12:00 昼食

13:00 解散

所感 子供達の学校のキャンプやスポーツク

ラブの試合等で参加人数が少なくなりました。

## 談話室



### 事故により離婚夫婦を救う

神昭分教会 神予布教所長 渡部京子

平成24年9月27日、神予布教所用木石丸アツ子さん73歳が、夕方友達二人で散歩されて横断歩道を渡っている時、38歳の女の方が運転されていた車に跳ねられ、救急車で病院に運ばれ、腰の骨が折れる重しゅうをおいしました。

加害者夫婦が病院に來られ、その時御主人様から離婚する話をしていたから、妻が考へ事をしていたのでしようと言われたそうです。石丸さんが離婚はしないで下さいと言われたら、御主人様が頑張りますと言って下さいました。又話に來てもいゝですかと言われ、何時でも來て下さいと言ったら、お二人が大変喜ばれたそうです。

この度の事故で嬉しい事ばかり、石丸家の講社祭に行く度、御主人様が、京ちゃん来てくれていたのですかと言って下さいました。御主人様は、おさづけの事は知って居られませんでした。奥様が事故に合われた夜、御主人様から、アツ子が事故に合ったので、おさづけをしてやってほしいと

立教百七十五年十一月月次祭 祭典役割表

控 え	胡 弓	三 味 線	琴	小 鼓	す り が ね	太 鼓	拍 子 木	ち ゃ ん ぽ ん	笛	て を ど り	お つ と め	地 方	役割	講 話	祭 主	扨 者		
													区分				海外布教推進講習会	谷内伸自
													坐り勤					
岡崎真一	虫明好美	今川佐智子	高田賀代子	高木昭祥	河原節喜	中島誠治	上原澄雄	岡崎和夫	吉岡誠一郎	門脇郁子	田中ますみ	大教会奥様	上原繁道	岡本久善	大教会長様	今川昌彦	上原志郎	佐藤道孝
内海史郎	森本富美子	武内正美	内海安子	中村義太郎	三島渉	虫明立生	西江昌直	中村道徳	森本忠善	笹尾一美	岡崎豊子	佐藤香苗	杉原博之	森本忠平	上原繁道	上原浩	門脇元教	吉岡壽
	三島照美	門脇加津	谷内美知子	武内清明	浅野明教	岡崎輝彦	赤木素志	山田敏教	山野弘実	横山小智	高木孝子	上原順子	田中隆之	谷内伸自	中村剛	田林久嗣	笹尾正治	中村邦義
													前半	春季大祭講話	大教会長様	指図方	贊者	後半
																岡本久善	内海史郎	高木昭祥

電話が有りました。私大変嬉しかったです。次の日病院に行きその話をしましたら、奥様が主人がそんな事を言ってくれたのかと大変喜んで居られました。私の家と御勤め先の中間に病院が有り、親神様の親心の深さを感じました。朝夕のおさづけを取り次ぎに行ける喜び、本当に有難く心から嬉しく思いました。加害者二人が来る度に、石丸さんが元気になられている姿を見て、お二人も大変喜ばれ、笑顔も出て来たそうです。石丸様も辛い苦しい毎日を通されたのに、加害者の夫婦の心を助けられました。話を聞き私も嬉しかったです。石丸様が信仰を続けて下さったお陰だと思ひ親神様、教祖に心からお礼を申しあげました。この事故の節を通し、神昭分教会月次祭に勤める心定めをして下さいました。

ある日大分良く成ったので京ちゃんも休んで下さいと言われ、私は心定めをしていますから心配しないで下さいと言って帰りました。次の日病院に行き「ビックリ」、石丸様が「やつれ」て大変辛そうな顔をされていました。どうされたのですかと聞きますと、私が不足心を使ったので神様が罰をあたられたのだと言われました。神様は罰はあたえられませんが、「素直な心」が大切よと言ったら、神様に凭れて行きますと云われ、その後おさづけを取り次ぎがせて頂きました。直ぐ優しい顔に戻りました。

親戚にも事故の事は知らせていられませんでした。耳にして次ぎ次ぎ見舞いに来られ石丸様の姿を見て、ビックリ信じられ無い夢のようだと皆様喜んで居られました。今日迄信仰させて頂いたお陰、京ちゃんのお陰と喜んで頂きました。

信仰して心の一步前進をして下さった事を心から嬉しく思い、会長様、奥様に親孝行が出来ました。教祖130年祭に喜んで頂けるよう私も信者さん達と共に心の成人が出来ますよう頑張りたいと思っております。ペンを取らせて頂きありがとうございます。御座居ました。



## 十一月月次祭祭文

これの笠岡大教会の神床にお鎮まり下さいませ

親神天理王命の御前に 会長上原理一 慎んで申し上げませ

親神様の「人間が陽気ぐらしをするのを見て共に楽しみたい」との親心溢れる御守護を賜る中に 青かった山や里の木々の葉も紅や黄色に変わりそして落葉となつて夏秋冬と季節の移り変わりを味わわせていただいております事は 誠に有難い事と喜ばせて頂いております 加えて陽気ぐらし実現の為の成人を促す上から旬々に親の声をお聞かせ下さり 陽気ぐらしへとお導き下さっております事は誠に有難く勿体ない極みでございます 先月も秋の大祭に於いて 真柱様から教祖百三十年祭に向けて諭達の御発布を頂きましたが 諭達に込められた思いを親の声と聞かせて頂き 以来日々は心も新たに親孝心一筋に今まで以上に勇み心を持ってたすけ一条の上に勤め励ませて頂いております

その中にも今日の吉日は月に一度の御祭日でございますので 只今からおつとめ奉仕人一同 喜び心たすけ心も一入に 明るく陽気に勇んで坐りつとめてをどりをつとめて十一月の月次祭を執り行わせて頂きます 御前には今日の日を楽しみに寄り集いました道の子供達が相共にお歌を唱和し 日頃の御高恩に改めて御礼申し上げる状を御覧下さいまして 親神様にもお勇み下さいませようお願い申し上げます

さて 大教会に続き本年は福山・高屋・神邊分教会が創立百二十周年を迎え 九月の神邊に続き 今月高屋、福山が夫々に記念祭を執り行わせて頂く事が出来 今日までの御守護 お導きの程に御礼申し上げると共に 先人達の思いを受け継ぎ より一層の成人を目指してたすけ一条に邁進する事を誓い合せて頂きました

又昨日は本部より富松幹禎先生にお越し頂き 大教会役員並びにおつとめ奉仕人、教長夫妻、布教所長で 諭達巡教を受けさせて頂きました 諭達に込められた教祖百三十年祭に向けての成人の歩みをしっかりと受け止め 親神様教祖にお喜び頂けるよう笠岡一丸となつて実動させて頂く覚悟でございます

更には又たすけ一条の歩みが国内のみならず 海外にまで延び広がるよう 本日は祭典に引き続き 海外布教推進講習会を開催させて頂きます 「世界一列をたすけたい」との親心に一歩でも近づく歩みに繋げていく所存でございます 加えて明後日二十三日には別席ひのきしん団参をさせて頂き 教祖年祭に向けての成人の歩みにより拍車をかけて行く所存でございます

何卒親神様には旬々にお聞かせ頂く親の声を頼りに成人の歩みを進める皆の誠実の心をお受け取り下さいまして 万たすけの上にも尚も自由の御守護を賜り 一人ひとりのたすけ心が次々と伸び広がり お望み下さる陽気ぐらしの世の状が一日も早く実現しますようお導きの程を 一同と共に慎んでお願い申し上げます

## こころの詩

▼天理教道友社発行『天理時報』、「時報歌壇」・「時報俳壇」より転載

▽笠岡に繋がる教友の方が選ばれ掲載されましたので転載させて頂きます。おめでとうございます。

11月25日付 芦品分教会

金谷眞佐代さん

屋上に陽気ぐらしの幕を張り

いつも見上げて心勇むる

福満分教会前会長夫人 福島悦子さん

封書にておぢばがえりを誘えば

メール届きぬ「おねがいします」と

海松ヶ岡分教会 藤井光子さん

富有柿の入りし白和えはんなりと

やさしき味よ柿の甘さは

海松ヶ岡分教会 池田広子さん

川べりに自転車よせてやり過ごす

子供神輿の威勢よきこと

▼養徳社発行『陽気』誌十二月号、「道柳」より転載

▽今回の課題は「理」、笠岡に繋がる教友の方が選ばれ掲載されましたので転載させて頂きます。おめでとうございます。

秀 詠 東悠分教会前会長夫人 田林美智子さん

願えども心通りや理の世界

▼表紙写真

(吉岡輝昭かさおか編集部員)

# 大教会だより

## ◎第八五七期修養科

自 立教175年9月1日  
至 立教175年11月27日

### \*教 養 掛

三ヶ月間 横山 逸郎  
(大教会准承事・  
東城分教会長)

一ヶ月目 吉岡 輝昭  
(安那分教会長)

二ヶ月目 津森 朋之  
(簸ノ川分教会長)

三ヶ月目 仙田 公男  
(天場山分教会長)

### \*修 了 者

弥高山	岡崎 治喜
芦 品	小林 謙太
稲 瀬	前原 啓史
米 美	三代 斉幸
簸ノ川	津森 一重
多古浦	山田 廣國
真 府	藤田 宗士
東 城	横山 真衣
芦 品	青木 縫子

## ◎教人資格講習会修了者

立教175年12月11日終講  
西伯 本多 正悟

## ◎直属ひのきしん特別隊

自 立教175年12月1日	笠岡 徳山 毅
至 立教175年12月10日	
自 立教175年12月11日	
至 立教175年12月20日	眞 府 藤田 宗士

## ◎三日講習会受講者

(立教175年3月以降)

3月	芦品 加納 謙①
5月	備中岡田 和子①
5月	松都 斉藤 志満子①
6月	香地華 渡辺 美恵子②
	芦加茂 小川 恵子②
	芦加茂 小川 裕子②
	高屋 重政 康子②
	坪生 阿部 通子②
10月	芦品 加納 謙②

天場山	野津 萬知子
稲瀬	前原 英子
鶴眞	藤井 末子

11月	上山 野賢 司①
12月	出雲 鳥谷 美奈子①

# 訃 報

## 武内清氏

大教会理事・高屋分教会三代会  
長・元岡山教区長  
12月11日出直された。享年92才



毎年12月に発表される流行語大賞。今年の大賞は、『ワイルドだろお』だった。これは、某芸人が持ちネタの中で言うお決まりのセリフで、子どもから大人まで幅広い世代に流行した。

『ワイルド』とは、「野生」などの意味があるが、私が、『ワイルド』と聞いて思い浮かべたのは、青年会本部制作のポスターである。熊野古道の険しい山中の写真をバックに、『荒道を行け』という文字が印して

ある。まさに青年会のあらきとური  
のような精神を、画に現したものだ。

さて、この一年私自身『ワイルド』  
だったのだろうかとふり返ってみる。  
教会、家庭、会活動など様々な場面  
において、現状に甘んじて守りの姿  
勢に入り、開拓の精神を忘れていな  
かっただろうか？ そこに情熱は  
あっただろうか？ などを自問して  
みると、反省の念ばかりである。ま  
してや、自分があらきとურიようを  
自負する青年会員である事を思え  
ば、『ワイルド』ではなかったと思  
う。

教祖百三十年祭向かう、年祭活動。  
諭達の中では『おたすけ』が急務と  
されている。しかし、身近な人に声  
をかける事は、実はなかなか勇気が  
いる事ではないかと思う。そんな時  
こそ、荒道を突き進むワイルドな精  
神で、自分の殻を破っていきたくと  
思う。  
来年は、ワイルドかつ繊細な心遣  
いで、少しでもおやさまに喜んで  
いただこうと考えている。 (う)